

日本語基本動詞 —— ロシア出版の教科書の観察から ——

アレキサンダー・コスチルキン

一年間日本語を習ってきた学習者が、日常的で単純な表現がいまだに使いこなせていないことに気づいた。「ホッチキスでとめる」「紐がとれた」「水が出ない」「ソースをとってくれる?」「経済学をとる」「財布をしまいなさい」「辞書に出ていない」「バッジをつける」。このような表現なしには、いくら日本語力が前進しても、日常生活にこまるに決まっているだろう。最近インターネットのお陰で日本のレアリアにとっても詳しくなった生徒は実は基本的な日本語で遅れている。語彙が一つ一つ習得できていても、*Встань на стул!*, *У тебя рубашка не заправлена!*, *У тебя пятно на рубашке!*, *Пропустите меня!*, *Развесь бельё!*, *Когда сдать контрольную?* のような場面では日本語に詰まってしまう。自分から簡単な組み合わせをつくるのがなぜか出来ない。その原因はどこか、ロシア出版の日本語入門教科書を検討してみた。ソ連時代に一番よく使われていたものと、新しくでた大学用教科書を一冊ずつ対象にした。

以上の例に出る動詞はみんな基礎動詞で、使用頻度も多義性も非常に高く、日本語に不可欠な語彙であることは言うまでもない。初期から導入されるのが当然だが、教科書による導入方法を詳細に調べてみると、明らかにこれらに傾向があると分かる。

カケルの場合はその訳として *садиться*, *звонить* を挙げ、コロケーションの「電話を／腰をかける」を圧倒的に多く載せている。「物を物にかける」という意味を問題にはほとんどしない。「橋／カギ／アイロン／パーマをかける」の共通概念が伝わってこず、学習者にとって統一した「語」として認識され難い。

カカルには、初期に *затрачивать (время)* を、後期に *вешать* を、という順番で挙げている。

トルの用例はだいたい「写真をとる」が中心で、基礎的な「手にとる」は、身につけさせるのに適した用例を十分に提供しない。

ツケルには *зажигать*, *включать* と最初に意味づけして、「暖房／電気／テレビ」のような目的語ばかり習わせ、「接合」の意味の扱いがまばらである。

ヒクは *играть (на муз. инструменте)* と訳して、その例に集中し、「手で物を引く」の用例は2・3箇所にしかならない。

他に出る、出す、入れる、入る、落とす、落ちる、過ぎる、しまう、あげる、踏む等の基礎動詞の導入・説明・練習のパターンを調べても、ほとんど変わらない。つまり、物理的意味がコアである基礎動詞を、その本来の意味からではなく、コロケーションに出現する派生的意味から始めるのである。こういった二次的な使用がいくつか出て、それをつな

げて統一させるコアを取り上げないからこそ、全体的なイメージが育たない。

以上に挙げた表現を利用できないのは、一年生でも十分語彙知識があるにもかかわらず、動詞の概念の統一化が欠けているだけである。改善の一つの方法としては、動詞導入の際に、必ずコアの使い方から習得させ、それを元に派生的意味・使用法を学ばせるというが最適である。学習者に一つの動詞の意味ネットワークを育てるという考え方が必要であろう。

Базовые японские глаголы в прямом значении – отражение в учебной литературе.

Костыркин Александр / Kostyrkin Alexander